第 1 部

令和 2 年度　鹿屋体育大学海洋スポーツセンター協力者会議

（令和 2 年 12 月 7 日）

研究テーマ

「大隅半島と海洋スポーツ」

令和２年度鹿屋体育大学海洋スポーツセンター協力者会議

鹿屋体育大学長挨拶

松下　雅雄　氏　（鹿屋体育大学　学長）

皆さん、こんにちは。本日はお忙しい中、本学の海洋スポーツセンター協力者会議にご出席いただきまして誠にありがとうございます。また、本日は、未来観光株式会社の村山寛光様には協力者を快くお引き受けいただきまして、重ねてお礼申し上げます。

本学の海洋スポーツセンターでは、海洋スポーツの教育研究に開学時より取り組んでいるところであります。加えて、海洋スポーツの振興におきまして、学外の方々との意見交換をする場として、本協力者会議を、毎年テーマを設定し開催しております。

今年度は、「大隅半島と海洋スポーツ」をテーマとして協議していただくこととなっております。鹿屋体育大学としましても、地域と共同してスポーツによる地域活性化に取り組んでいるところであります。

本会議が、今後の海洋スポーツの発展につながる有意義な意見交換の場となることを祈念しまして、簡単ではありますが挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

海洋スポーツセンター長挨拶

中村　夏実　氏　（海洋スポーツセンター長）

本日の議事を進行させていただきます、鹿屋体育大学海洋スポーツセンター長の中村と申します。よろしくお願いいたします。本来ならば、ご出席いただきました皆様及びオンラインでご参加いただいた皆様お一人ずつをご紹介すべきところなのですが、時間の都合等もございますので、お配りしております出席者名簿をもちまして皆様のご紹介に代えさせていただきたいと思います。

それでは、今年度のテーマについて私からご説明させていただきます。

海洋スポーツセンターでは、ここ 10 年間にわたって、どのように海洋スポーツによる地域振興に寄与できるのか、ということをテーマに様々な方々からご意見を頂く機会を得てまいりました。その間に、資源調査からネットワークの構築、プログラム開発と提案など、少しずつ進めてきたところです。また、行政による後押しもあり、鹿屋市では、「ユクサおおすみ海の学校」、垂水市では、「マリンパーク」が開業し、浜平から高須辺りの海岸沿いでマリンスポーツをする方の姿を見かける頻度が増したと感じております。その後、さらなる振興を目指して、協議会あるいはネットワーク会議などをつくろうと言いつつも、な

かなか現実化しないでここ 2，3 年経っているのが現状でございます。

海洋スポーツを専門とするセンタースタッフの立場で、少し具体的に海洋スポーツ振興をセンターのミッションと掲げる目的を申しますと、海辺に集って楽しむ人が増えることで、海洋スポーツをする人口が増えれば、そこから発展して、ヨットやカヌーといった競技人口の増加にもつながるのではないか、また、海洋スポーツ人口が増えれば、雇用も増えるだろうし、雇用が増えれば、海洋スポーツの専門学生にとっても、仕事としての具体性が見えてくるだろうという、長期的な目的を持つものです。

この辺りと、各地域の振興の目的とをすり合わせながら、会議案内に記載されていますように、将来的には大隅半島＝マリンスポーツといったイメージが全国的につくことを夢見ております。そこへ向かって、海洋スポーツセンターとしてはどのような取り組みが可能かを考えるきっかけを頂けたらありがたいと思っております。

このような主旨で、会議テーマを「大隅半島と海洋スポーツ」と広くおきまして、村山様には、大隅半島のさらなる振興の可能性について、お話いただくことをお願いいたしました。

村山様とは、村山様が平成 29 年から地域おこし協力隊として、鹿屋市ふるさと PR 課でグリーンツーリズムをご担当されていたころが最初の出会いです。

本来はこちらでご紹介するところですが、ご発表の中で、これまでの活動もお話いただいておりますので、ここでは割愛させていただき、早速、ご講演に移らせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

～大隅半島西海岸の水辺活動・マリンスポーツ振興について～

村山　寛光　氏　（未来観光株式会社　代表取締役）

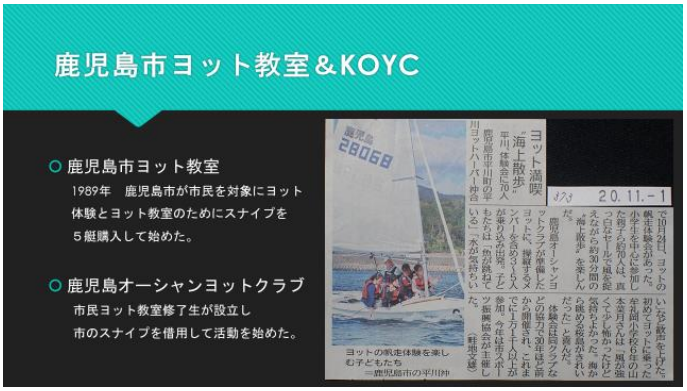
みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました未来観光株式会社の村山寛光と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、鹿屋体育大学の海洋スポーツセンター協力者会議においてお話させていただく機会をいただきまして、誠にありがとうございます。本日は、「大隅半島と海洋スポーツ」という会議テーマのなかで「大隅半島西海岸の水辺活動・マリンスポーツ振興について」というタイトルで私の考えを、お話させていただきます。 それでは、着席してお話をさせていただきます。

本日のお話をさせていただく結論から申しますと、『大隅半島西海岸・マリンスポーツ推進協議会』(仮称) 設立のご提案です。 英語で言えば、「Osumi Peninsular West Coast Marine Sports Promote Council」略して OWC-MSC。これは単なる略称でございます。「大隅半島=海洋スポーツ」というイメージのブランド化を目指す、トリガー(引き金)となるものです。

今日のお話の内容は、私とマリンスポーツ、鹿屋市における活動、それから、観光について、最後に、大隅西海岸マリンスポーツ推進協議会(仮称)の私なりの考えをお話させていただきたいと思います。

まず 1 番目の「私とマリンスポーツ」。私は 48 歳で転職いたしました。その時に、鹿児島の平川でヨットが何艘も出ていて、いつか乗りたいなと思ったときに、鹿児島市の市民の広場に掲載された市民ヨット教室の案内を見て参加いたしました。

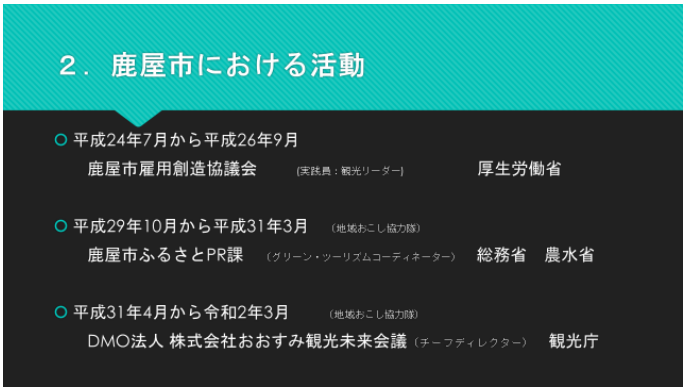


市民ヨット教室は、1989 年 5 艇のスナイプを購入し始めたようです。 鹿児島市は、よく箱モノ(ハード)ばかりつくるといわれておりますが、この教室は今でも続いており、良いソフトの成功例ではないかと思っております。その後、その修了生が構成メンバーの「鹿児島オーシャンヨットクラブ」に入会しました。 優雅な帆走をイメージしていたのですが、「押さんか!　引かんか！」の怒声のなかでやってまいりました。そのおかげで今日があるのではないかと思っております。 瞬時の判断ミスが事故につながりますので、厳しい言葉も必要かなと思います。このクラブは 50 名くらいのメンバーがいます。このクラブは参加を強制しているわけでもないのですが、毎週日曜日 10 名程度参加して 2，3 艇程度出艇し

ております。また、20 周年記念の時に、現在どこにも立ち寄らずたった一人で地球を一周するヨットレース「ブアンデ・グローブ」に参加している白石康次郎さんをお呼びして講演会を行ったこともあります。
最近のヨット体験の様子が新聞に掲載されています。

10 年くらい経ったときに、同年代の者 10 名でクルーザーを持とうという話になり、大阪にあった中古の YAMAHA30SII (Sunsplash) を購入してチーム SS として、沖小島を回ったり、新島へのクルージングを楽しんだり、種子島カップや三島カップレース等に参加したりしております。あいにく今年は数レースしか行われておりませんが、このメンバー7 人が 10 月 23 日にユクサおおすみ海の学校に来て下さいまして、ユクサのスタッフを体験帆走していただきました。また、鹿児島オーシャンヨットクラブやチーム SS はレースに参加もしますし、レース運営のお手伝いもいたしております。

この写真は、チーム結成後初めて外洋レース、種子島カップに参加後、佐多岬沖を帰港する写真で、メンバーも男性、女性、若年者、年配者で構成しております。
2017 年、今から 3 年前に、最初は日本一周をしようと話しておりましたが、結局九州一周航海をしようということで、9 月 25 日に鹿児島を出港して 2 週間かけて時計と反対周りで九州一周を行いました。 10 名の内 4 名はずっと 2 週間乗りました。あとのメンバーは、途中途中交代しながら 10 名全員が参加した形です。非常に良い経験をしました。



次に、私の鹿屋市における活動ですが、平成 24 年に厚生労働省が食と観光から雇用拡大を図る趣旨の事業に採用され、11 人のメンバーで実践型事業を始め、食が 7 つ、観光が 1 つのテーマで活動をしました。 食のメンバーはアスリート食堂が丁度オープンする時期でお手伝いをしたこともありました。
観光については、丁度グリーン・ツーリズムが盛んに言われるようになり、農業体験と平和学習を目的に南薩摩に多くの教育(修学)旅行生がきておりました。
グリーン・ツーリズムとは『農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動』と定義されております。

鹿屋でも海上自衛隊鹿屋基地の史料館を使って、平和学習をアピールするためにパンフレットを作成しました。 関西圏や首都圏にいっても、「かのや」と呼んでもらえず、カヤ、シカヤといわれないように、鹿屋の漢字にフリガナをつけました。 また、鹿屋には畑の真ん中に戦争の遺構が数多くあり、それらをまとめたのが、『鹿屋の戦争遺跡』です。 これが、市長の目に留まり、のちに串良の電信地下壕や 笠之原の掩体壕(航空機を隠す格納庫)の文化財指定や野里の桜花碑前の駐車場整備、鹿屋市認定の平和学習ガイドの育成につながりました。

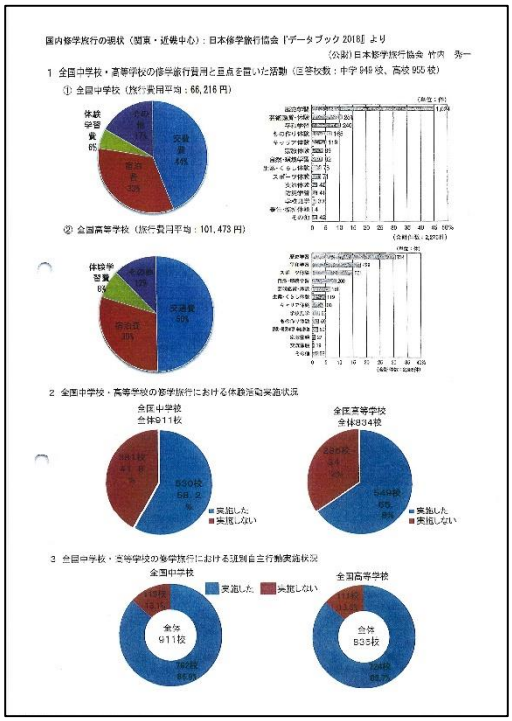
いったん鹿屋を離れましたが、平成 29 年に地域おこし協力隊として、再度鹿屋市にまいりました。グリーン・ツーリズムの推進をするために、また修学旅行の大隅の窓口を設立するのが目的です。
鹿屋市ふるさと PR 課においては、農林水産省の農山漁村振興交付金事業として、体験メニューの開発を行いました。こちらの SPRC の前田先生には幾度となくご無理をお願いして、学校の先生や、旅行代理店、県の職員、首都圏の中学校野球部などを案内してメニュー化を図りました。 大隅 4 市 5 町と民間が出資した DMO 法人『おおすみ観光未来会議』に私が移ったあと、このように市の職員がメニュー化しました。
「おおすみ観光未来会議」では、収益事業の確立を目指して、「旅行サービス手配業」を県知事に届けて、教育旅行の誘致をいたしました。この 3 月、地域おこし協力隊の 3 年任期満了により、退職し 4 月 30 日、なにか大隅の観光発展の一助となるべく起業いたしました。
ご覧のように、後ろに省庁の名前がありますが、鹿屋市雇用創造協議会は厚生労働省の実践型雇用創造事業として、地域おこし協力隊は総務省、農泊推進対策事業は農林水産省、DMO 法人は、観光庁の事業として交付金をいただいております。

次に、観光についてお話したいと思います。一つは、教育旅行であり、また、先ごろ発表された鹿児島県の観光統計資料をもとに教育旅行とスポーツ合宿について、そして、現下の観光事情について、お話させていただきます。

まず、教育(修学)旅行の現状ですが、公益財団法人日本修学旅行協会の理事長である竹内秀一様からいただいた資料をもとに説明させていただきます。

一番右上にもありますように、旅行費用は中学校で66,216円、高校生で101,473円、どちらも、交通費と宿泊費が3分の2を占めています。体験学習は中学校が 6%、約 4,000 円、高校生が8%であれば8,100円くらいになります。

重点活動は中学生が一番目に歴史学習、芸術鑑賞・体験、平和学習と続いています。スポーツ体験は9番目になっています。高校生は、歴史学習が一番、続いて平和学習、そしてスポーツ体験となっております。それから、全国中学校・高等学校の修学旅行における体験活動実施状況については、中学校、高校とも半分以上が実施しており、一番下の班別自主行動は、80%強が行っております。鹿児島市内はボランティアガイドが連れて天文館辺りを案内しております。6クラスや 7 クラスなど多数のクラスがある高校生については、クラスごとに目的地を変えているようです。



『データブック 2018』より
（公財）日本修学旅行協会　理事長　竹内秀一

『データブック 2018』より
（公財）日本修学旅行協会　理事長　竹内秀一

次に関東・近畿の中学・高校の修学旅行先上位ベスト 5。関東の中学校は、京都・奈良・広島・滋賀・大阪の関西方面。近畿の中学校は、東京・沖縄・千葉・長崎・福岡。高校に関しては、関東の高校が、沖縄・大阪・京都・長崎・広島。近畿の高校に関しては、沖縄・北海道・長野・東京・千葉・鹿児島。千葉が多いのは、ディズニーランドがあるからだと思います。

資料の真ん中の方には、修学旅行実施基準が記載してあります。各都道府県によってこのような基準で実施しなさいというように決まっています。

また、修学旅行を特別教育として定義してありますけれども、「主体的・対話的で深い学び」「生徒に生きる力を育むこと目指すもの」とあります。それから、「体験的な活動を積むことができるようにすること」一番下については、「自

然体験や社会体験などの体験活動を充実とするとともに、体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの事後の活動を充実すること」といったことを目的として、学校の先生たちは目的地を選んでおります。

次に、修学旅行はいつ決まるかといいますと、約 1 年半前におおむね決定されます。 特に、料金を低く設定した集約列車は前々年の 9 月に申し込みが始まり、11 月末に申し込み結果がわかり、翌年 4 月に JR によって確定します。集約列車を手当てできなかった学校は少し料金が高くなった定期列車を手配することになります。ただし定期列車は一列車 150 人まで、約 3 クラスまでの上限があります。

NO	出発日			府県市(郡)		学校名	往路		復路	
	月	日	曜				乗車駅	降車駅	乗車駅	降車駅
43	6	10	木	大阪市	住吉区	住吉中学校	新大阪	広島	広島	新大阪
44	6	10	木	大阪市	平野区	平野中学校	新大阪	博多	博多	新大阪
45	6	10	木	大阪府	八尾市	桂中学校	新大阪	博多	博多	新大阪
46	6	11	金	大阪府	八尾市	久宝寺中学校	新大阪	博多	博多	新大阪
47	6	13	日	大阪府	吹田市	南千里中学校	新大阪	博多	博多	新大阪
48	6	14	月	大阪府	八尾市	南高安中学校	新大阪	博多	博多	新大阪
49	6	15	火	大阪市	西成区	天下茶屋中学校	新大阪	広島	新山口	新大阪
50	6	15	火	大阪府	守口市	庭窪中学校	新大阪	博多	博多	新大阪
51	6	16	水	大阪市	西淀川区	淀中学校	新大阪	博多	博多	新大阪
52	6	16	水	大阪市	東住吉区	矢田西中学校	新大阪	広島	小倉	新大阪
53	6	17	木	大阪府	和泉市	光明台中学校	新大阪	博多	博多	新大阪

NO	出発日			府県市(郡)		学校名	往路		復路	
	月	日	曜				乗車駅	降車駅	乗車駅	降車駅
1	5	26	水	大阪市	住吉区	大和川中学校	新大阪	博多	志布志	大阪南港

D6コース

NO	出発日			府県市(郡)		学校名	往路		復路	
	月	日	曜				乗車駅	降車駅	乗車駅	降車駅
1	4	25	日	兵庫県	姫路市	家島中学校	姫路	鹿児島中央	鹿児島中央	姫路
2	4	25	日	兵庫県	姫路市	琴陵中学校	姫路	鹿児島中央	鹿児島中央	姫路
3	4	25	日	兵庫県	姫路市	坊勢中学校	姫路	鹿児島中央	鹿児島中央	姫路
4	5	15	土	神戸市	長田区	西代中学校	新神戸	鹿児島中央	鹿児島中央	新神戸
5	5	15	土	兵庫県	明石市	大久保北中学校	西明石	熊本	熊本	西明石
6	5	18	火	神戸市	中央区	渚中学校	新神戸	新八代	鹿児島中央	新神戸
7	5	18	火	神戸市	中央区	布引中学校	新神戸	新八代	鹿児島中央	新神戸
8	5	18	火	神戸市	兵庫区	湊川中学校	新神戸	出水	鹿児島中央	新神戸
9	5	19	水	京都府	京田辺市	大住中学校	新大阪	鹿児島中央	鹿児島中央	新大阪
10	5	19	水	神戸市	北区	大池中学校	新神戸	出水	鹿児島中央	新神戸
11	5	26	水	京都府	長岡京市	長岡第二中学校	新大阪	鹿児島中央	出水	新大阪
12	5	26	水	神戸市	西区	平野中学校	新神戸	新八代	鹿児島中央	新神戸
13	6	2	水	大阪府	交野市	第一中学校	新大阪	鹿児島中央	鹿児島中央	新大阪
14	6	2	水	兵庫県	明石市	魚住中学校	西明石	熊本	熊本	西明石
15	6	9	水	大阪市	西区	堀江中学校	新大阪	鹿児島中央	出水	新大阪
16	6	9	水	兵庫県	加古郡	稲美北中学校	姫路	鹿児島中央	新八代	姫路

-8-

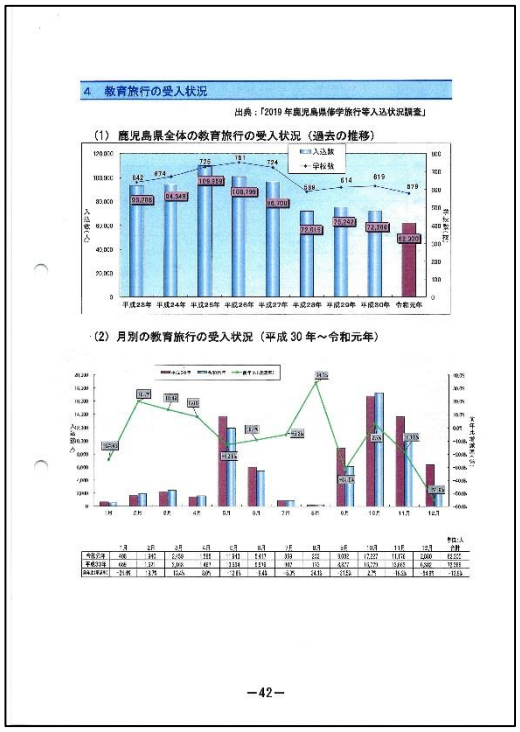
2021（令和 3）年度
集約列車運送計画（付・自主計画集計）

これは、来年 4 月か 6 月の熊本以南を予定される学校です。この資料でいいますと、5 月 26 日、大阪市の大和川中学校は、新大阪から博多に着いて、バスで熊本まで降りてきて、帰りは志布志から「さんふらわあ」を使って大阪まで帰るパターンだと思います。

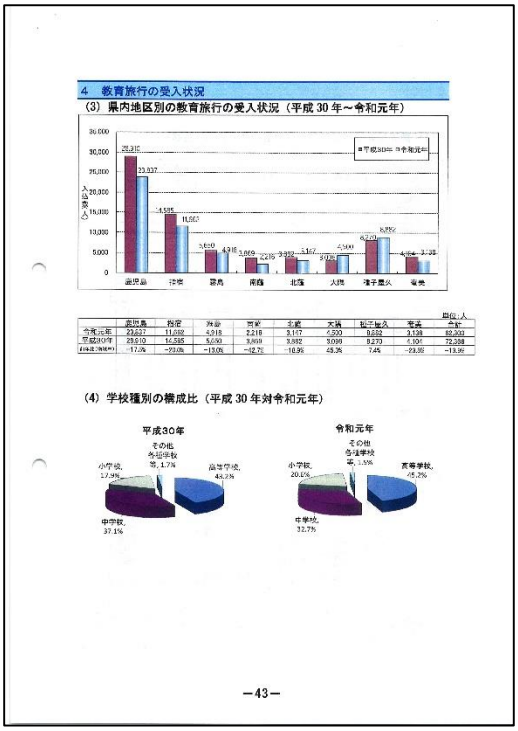
D6 コースというのは、熊本以南になります。熊本地震以前は、この倍くらいあったのですが、熊本地震以降は減りました。それからもう一つ、姫路市が多いのは、鹿児島県の教育旅行受入協議会が姫路の教育委員会に、鹿児島に来てくださいと運動をした結果だと思います。

次に、鹿児島県の観光統計から見ていきます。こちらを見ていくと、鹿児島県の教育旅行の受け入れ状況については、平成 25 年の熊本地震の前には 10 万人を超えていたのですが、近年は 6 万 3 千人に落ち込んでおります。

それから、月別の教育旅行の受け入れ状況は、春は 5 月と 6 月、秋は 9 月後半から 12 月初旬がピークです。私の感覚でいえば、5 月の連休から 6 月の梅雨の前までの 6 週間、それから 9 月の祝日、12 月は航空運賃が劇的に安くなるので 12 月の第一週はかなり希望が多いのが実情です。



令和 2 年 10 月
鹿児島県 PR・観光戦略部観光課



令和 2 年 10 月
鹿児島県 PR・観光戦略部観光課

次に、教育の受け入れ状況は鹿児島地区が一番多く、次に指宿、種子島・屋久島地区、霧島地区、そして大隅地区となっています。特に、種子島・屋久島地区、大隅地区は増えております。大隅地区は、おおすみ観光未来会議が貢献できたのではないかと自負しております。

下の学校種別の構成比については、中学校・高等学校が半分以上を占めております。

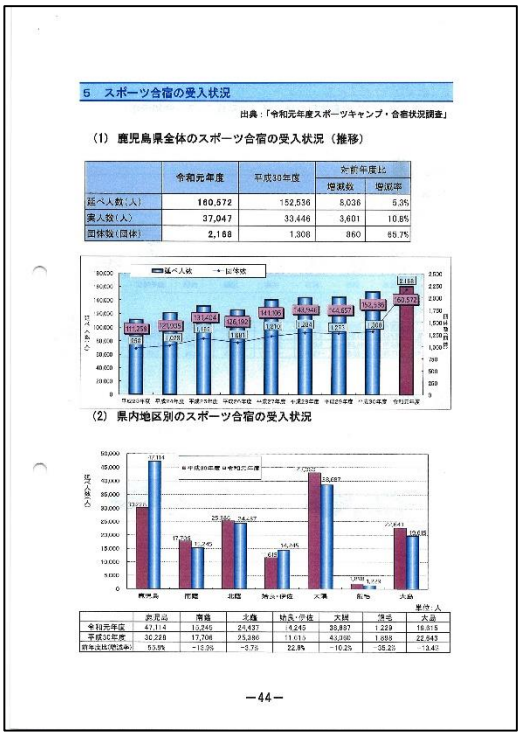
次にスポーツ合宿についてお話させていただきます。延べ人数は、平成 30 年度が 152,536 人で、令和元年度は 160,572 人で 5.3%の増加となっております。実人数も 33,446 人から 37,047 人と 10.8%の増加となっております。

下の方にいきますと、県内地区別のスポーツ合宿の受け入れ状況とありますが、鹿児島地区が一番、二番目が大隅地区、そして三番目が北薩となっています。

次に、団体区分（カテゴリー）では、高校・大学そして社会人が圧倒的に多いようです。

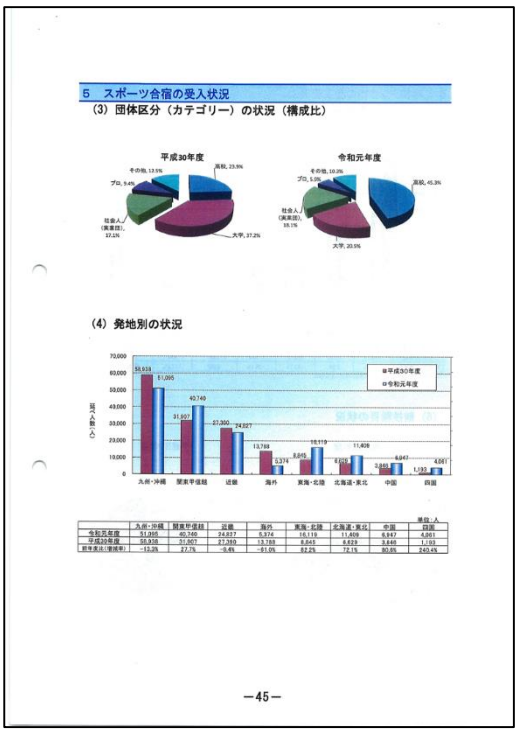
そして、下の方にいきますと発地別の状況です。九州・沖縄が最も多く、関東甲信越、近畿の順になっております。

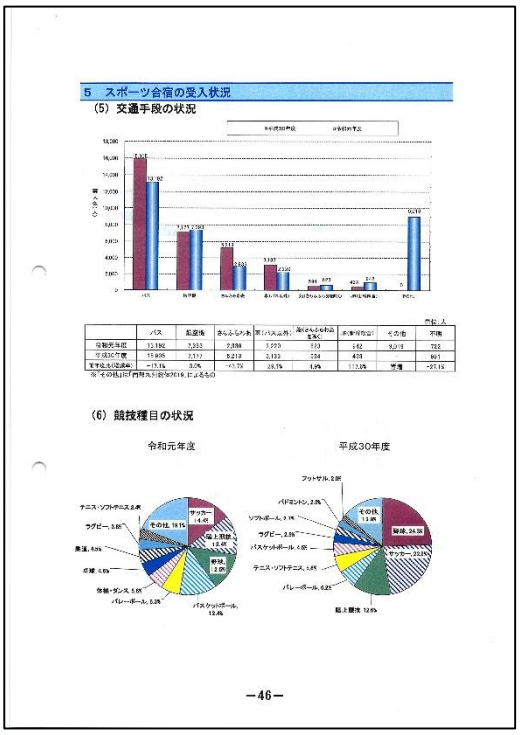
次に、交通手段はバスが多く、航空機そして「フェリーさんふらわあ」の利用が多いようです。



令和元年 10 月
鹿児島県 PR・観光戦略部観光課

それから、競技種目については、野球、サッカー、陸上競技、バスケット、バレーが多いようです。





令和 2 年 10 月
鹿児島県 PR・観光戦略部観光課

それでは、現下の観光事情を見ていきましょう。星野リゾートの星野氏の意見と、大阪観光局の理事長、溝畑宏さん(前観光庁長官)の意見を紹介します。私は、彼らは現在の観光におけるオピニオンリーダーと思っています。彼らの発言が観光産業に大きく影響すると思います。

星野さんは、今度霧島に高級旅館「界　霧島」を 1 月 29 日にオープンされますけれども、彼は早い時期からマイクロツーリズムを推奨されています。1 時間から 2 時間圏内の旅行です。大隅でいえば、約 59 万人の鹿児島市、約 12 万人の霧島市、約 16 万人の都城市あたりがマーケットでしょうか。御覧のように、2019 年の旅行消費額 27.9 兆円のうち、訪日外国人は 4.8 兆円にすぎません。国内宿泊が 17.2 兆円と圧倒的に多いのが実情です。

また、昔は駅前の旅行代理店に行ってパンフレットを見る人が多かったのですが、最近は、旅行サイトが多くなってきています。右下にあるように、そういうものがあっても地元の人は見ずに、タウン誌を見ます。タウン誌のような発信の仕方も必要ではなかろうかとおっしゃっております。

真ん中あたりに書いてありますように、「日本人客の重要性は以前から訴えていた。」とありますが、この消費額を見ても、やはり日本人、国内需要が重要ではないかと思います。

それから、25 年問題というのがありますけれども、2025 年に団塊の世代が全て 75 歳以上になることに伴って、若者の旅行参加率を上げていくことも重要です。

そして、一番下の左側に(体験型の)「コト消費」の開発を説いていらっしゃいます。

また、溝畑宏さん(大阪観光局の理事長)は、2、3 日前に鹿児島に来てお話されたようですけれど、観光のキーワードとして、健康や癒し、ウエルネスを挙げておられ、訪日外国人客は 22 年に回復するとの見方をしています。切り口としては、自然、景観を効果的に発信すべきと彼は言っております。まさしく、収束に向けて計画を立て、体制を整えるべき時期だと思っております。

いろいろ、周りの状況を説明させていただきましたが、本題の「大隅西海岸・マリンスポーツ振興推進協議会(仮称)」について、意見を述べさせていただきたいと思います。

鹿児島県は、「かごしま未来創造ビジョン」というものがありまして、真ん中の、施策展開の基本方向の 2 番目に「地域を愛し世界に通用する人材の育成と文化・ スポーツの振興」とあり、まさに鹿屋体育大学さんに期待されていることではないかと思います。それから、一番右下にいきますと、教育環境づくりとして、鹿児島の発展を牽引する人材の育成とあります。また、一番下の、「する・みる・ささえる」スポーツの振興においては、生涯スポーツの推進、競技スポーツの推進、スポーツを通じた交流の推進、これを鹿児島の将来ビジョンとして掲げてあります。

鹿屋市においても「第二次 鹿屋市総合計画」基本目標として、「いつでも訪れやすいまち、地域資源を生かした観光の推進、スポーツによる交流の推進」を挙げています。

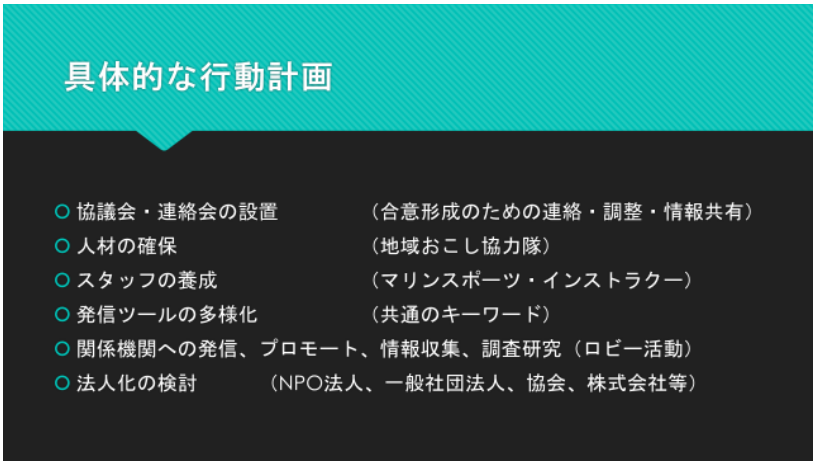
そのなかで、KPI(重要業績評価指標)として、スポーツ合宿数を 2017 年の 18,878 人から、2024 年には 25,000 人としています。スポーツイベント参加者数を同じく 5,849 人から 11,000 人とする目標があります。

ここで、DMO 法人について、少し説明いたします。観光地づくり法人(DMO)とは、「地域の多様な関係者を巻き込みつつ、科学的アプローチを取り入れた観光地づくりを行うかじ取り役となる法人」 DMO が必ず実施する基礎的な役割・機能(観光地域マーケティング・マネジメント)として (1)多様な関係者の合意形成(2)各種データの継続的な収集・分析・データに基づく戦略(ブランディング)の策定、それから、KPI の設定、PDCA サイクルの確立(3)地域内の関係者による観光関連事業と DMO 戦略の調整・連携株式会社型 DMO については「稼ぐ力」の醸成でありますが、観光協会の看板を付け加えただけのような法人もあることから最近、運用が厳しくなり、3 年更新や不適格であれば登録取り消しもあるようになりました。

次に、最近、SDGs という言葉を耳にしますが、鹿屋市の市報でも紹介されており、9 月号で特集しているようです。大崎町では推進協議会を立ち上げの方向です。

それから、一番右にいきますと、鹿屋体育大学の図書館長の山田様が 4 月の時点で「SDGs 達成にスポーツの力」と題して南日本新聞に寄稿されています。このなかで、「スポーツの力を活用した SDGs の達成」スポーツと開発(国内で行われる地域開発と国際開発)に関する研究と教育の重要性、スポーツを通して行われる地域社会づくり、スポーツを通して、平和な国際社会の構築に向けたいろいろな取り組みや実践、協力が可能であるとされています。まさしく、この協議会が実践・検証の場になるのではないでしょうか。私は、DMO の手法や SDGs をキーワードとして推進協議会をすすめたらよいのではと思います。

この地区には、鹿屋体育大学や国立大隅青少年自然の家、民間の体験施設や宿泊施設、また、マリンスポーツにおいて高度に特化専門化した事業主がおられます。本来、農泊は旅行業法に基づく「簡易宿泊所」の許可が必要です。鹿児島県は、各自治体に協議会を設け、行政が関与することにより、教育旅行の受入を認めてきました。西海岸において、個人や法人の実務者に加え、行政や大学が参加できれば、強靭な組織になります。合意形成がなされれば、ほかにない強力な素晴らしい『コンソーシアム』ができるのではと思います。まずは、連絡会を立ち上げ、意見の合意形成をはかることが大事です。



人材の確保については、鹿屋体育大学において、例えば、「スポーツを通して西海岸地区の地域活性化を図る」目的で地域おこし協力隊の制度(最長 3 年間)を活用したらいかがでしょうか。地域おこし協力隊は「よそ者」「若者」「女性」とよく言われていますが、都会の若者のセンスを持ったものが、彼らのニーズを良く理解して地域の特性を生かしてくれるのではないかと思います。

私のときは、年間 400 万円の事業費があり半分が報酬、後の半分が活動費です。住居費が月 5 万円の 12 ヶ月まで認められ、車両の使用も活動費として認められます。最近は 440 万円になり、来年度はさらにアップの見込みだそうです。

先に説明したように、教育旅行の実施はだいたい平日です。こういった体験プログラムを提案していけば、平日は教育旅行生の確保が見込まれます。先ほどお話しましたように、1 年 3 か月前に決まりますので、しっかりと計画が立てられ、顧客も確保できることになります。

現在、教育旅行については、旅行代理店や学校がどこで何をさせようかと困惑している状態です。早い時期に「分散体験型のマリンスポーツ」というプログラムを提案できれば勝機はあるのではないでしょうか。

そして、週末は近隣都市の若人、長期休みは大学等の合宿等が期待できます。また、共通なプログラムを設定することにより、器材やスタッフの連携も図られるのではないでしょうか。鹿屋体育大学の学生さんのアルバイト先として、またあらゆる年齢層への対処の仕方等、教育的観点からも有効ではないかと思います。もちろん、安全が最優先します。安全意識の啓発・啓蒙も他の地区以上の信頼を得る仕組みも必要です。先ごろ、香川県で修学旅行中の船舶の事故がありました。かねてからの「浮いてマテ」の訓練の効果があっ

たと報道されています。

風雨が強い時には、代替のプログラム、例えば流木を使った木工教室、ロープワーク、それから、バスが手配できれば、鹿屋航空基地史料館の平和学習や内之浦宇宙空間観測所の航空宇宙科学の学習や輝北天球館の見学等が手当てできれば良いと思います。

国や県においては「新しい生活様式」「大隅の新しい旅行スタイル」が模索され事業が展開されています。マリンスポーツという今はマイナーではあるが、新しい大隅の魅力あるコンテンツとして協議会を通じて有効に提案でき、受注につながります。

海洋スポーツセンターが今まで調査・研究し蓄積したデータを開示して、この協議会が実施・検証することも可能ではないでしょうか。協議会が団体としての存在が認知されれば、発信力や発言力も強まり、新たな調査・研究の機会が増え、幅広い事業展開が可能になるのではないでしょうか。2021 年は東京オリンピック、2023 年は鹿児島国体、2025 年は大阪万博と人の流れが期待されます。2022 年には世界的ホテルチェーンのマリオットホテルグループが垂水市と南大隅町の道の駅にホテルを建設します。欧米系の訪日外国人は、長く滞在して地域を探求する傾向が強いそうです。これもまたチャンスではないでしょうか。来年 3 月には、志布志・都城道路が都城市街地近くまで延伸します。東九州自動車道、鹿屋・串良と志布志も来年夏ごろまでには開通の見込みです。志布志湾岸や内之浦地区へのアクセスも改善されます。そういったことで、大隅東海岸もまた魅力ある目的地になりえると思います。水辺というキーワードからすると、大隅湖のカヌーや河川の沢のぼりも考えられます。

マリンスポーツを軸として、中長期で計画を立てて展開すれば、魅力ある大隅西海岸の創生に大いに貢献し、東海岸へも波及するものと考えます。

先に述べました「大崎町 SDGs 推進協議会」また、自然豊かな鹿児島湾を利用した観光振興を考える「環錦江湾観光連絡会議」等、身近に着々と目的意識を持った取り組みが始まっております。記事によれば「環錦江湾観光連絡会議」は、マリンスポーツの充実や地域資源の磨き上げを通じて交流人口増加を目指しています。これらの団体とも連携を行うことにより、さらに相乗効果が見込まれます。

この地区のマリンスポーツの素材や人材そして社会的な環境は整いつつあります。今が、「おおすみ西海岸マリンスポーツ推進協議会」(仮称)立ち上げのチャンスではないでしょうか。

以上です。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

中村　夏実（海洋スポーツセンター長）

村山様、ありがとうございました。これまでの協力者会議で、観光や人材をテーマにしてきました。ここでは現在の観光の現状をお知らせいただいて、これからの振興の可能性をまとめてご提案していただいたように感じております。皆さまの方から何かご質問、ご意見等ございましたら積極的にご質問いただけたらと思います。どなたかございましたら、ご発言の方をお願いいたします。

前谷　嘉一（鹿屋体育大学　理事・副学長・事務局長）

お話大変ありがとうございました。興味深く感じております。大変面白い話なので、聞きたいのですけれども、海洋スポーツというところで特化していきますと、本学は、公開講座などでヨットなどもやっていますけれども、今後これを進めていく中で、需要としての海洋スポーツがどのくらい出てくるのか、それに対する供給量、いわゆる対応できる力というのは、大隅西海岸のマリンスポーツ教育、もしくは大隅地区の中でどのくらいあるのかをお聞かせいただきたいと思います。

先ほど、修学旅行の話が出ましたけれども、それ以外にも、以前ヨット教室に 40 代くらいの方がいたというのもありましたけれども、いわゆる資金力がある方たちがどのくらい受けたがるのかというのが気になります。と言いますのも、本学も Blue Winds（ブルーウィンズ）事業をやっておりまして、スポーツの普及のために資金を払ってスポーツを体験して、それを回していくというような、大学が全部負担をするのではなくて、参加者から資金を取ってスポーツを回していくという事業を行っており、文科省としても進めたいと言っております。それを進めていくうえで、独り立ちできるような需要と供給が成り立つのかをお尋ねしたいと思います。

村山　寛光（未来観光株式会社　代表取締役）

私が、鹿児島市のヨット教室に行ったときには、保険料の 500 円だけだったと思います。市の助成金が出ていたのだと思います。それから、新しい事業ですので、最初から資金的手当ては非常に厳しいと思います。私が関わってきた事業は、ほとんどが国の事業です。中にはずっと助成金を当てにする事業もありますけれども、平和学習会についても、6 年間かけて認知されるようになってきました。時間がかかると思って事業を立ち上げなければいけないと思います。最初の 1 年 2 年 3 年に関しては、何らかの財政的補填が必要かなと思います。修学旅行をベースにして 2 年後 3 年後に定着してくると、ユクサやマリンパーク、大隅青少年自然の海の家についても、そういった需要が高まってくれば、スタッフを雇えるようになり、スタッフが雇えるようになれば、それに対応できる体制ができると思います。それと、鹿屋体育大さんの教育の過程の一つで、市民講座をされていますけれども、行政に対

してアピールをして、お力添えを頂ければ、当面の 2, 3 年、助成金なり事業をして、なおかつ修学旅行の体験などでアピールしていけばベースができていくのではないかと思います。ですから、3 年 5 年のスパンで考えていかなければいけないのかと思います。

中村　夏実（海洋スポーツセンター長）

ここで、私から指名させていただきたいと思います。垂水のマリンパークの田屋敷さんが参加していただいておりますけれども、マリンパークは一昨年の 10 月にオープンされているかと思うのですが、実際に修学旅行生も受け入れられているというようにお伺いしていますが、現状と今後の方向性について思うところがあれば、ご発言いただきたいと思います。

田屋敷　幸太（マリンパークたるみず　店長）

マリンパークたるみずは、垂水市から財政的補填をもらいながら 2 年目の経営を行っています。その中で、夏場は一般のお客さんが非常に多いですが、シーズンを外れた 9 月 10 月というのは、修学旅行や団体客を受け入れています。特に今年は、修学旅行や団体客の利用が多くなっており、修学旅行は 12 件（団体合わせると 20 件）になります。一方で、1）日中のほとんどが海上に出ているために体験プランや行程の交渉がなかなかできないこと、2）大規模な参加人数（例えば 200 名程度）に対してのスタッフや備品数の確保が厳しいことなどが理由で、違う旅行先を検討される方々も多くいます。そこまでの大規模の参加人数になると、マリンパーク単体では受け入れが難しいので、大隅半島のまわりの関係者の方々に協力をいただいて行うことができれば、もっとそのような規模の人数も受け入れられたのではないかと思います。そういった意味でも、このように集まって話をしたり、団体での問い合わせが来た時に中心となってまとめる方がいて、その方をもとにそれぞれが協力し合って受け入れることができたら、もっと満足のいくプランが確立でき、また大隅半島全体として良いアピールになるのではないかと思います。なので、このように集まって話して、団体を受け入れていくというかたちがいいのではないかと思います。

中村　夏実（海洋スポーツセンター長）

ありがとうございました。海洋スポーツセンターでも、公開講座を行っているのですが、参加人数はそれほど多くなく限られていますし、学生の教育授業も含めてやりますから、少人数のスタッフで大人数を扱うということは、今までにあまりありません。だから安心感があるのでしょうが、プログラム実施のリクエストは多くあり、我々では受け入れできないというところもあったので、マリンパークたるみ

ずさんや、海の学校ができたということは非常にありがたくて、そちらと連携して事業が展開できれば良いなと思います。事務局長がおっしゃったように、需要ということに関して私が感じるところでは、公開講座ではリピーターさんが多い印象です。ただ、数は限られているので、そのリピーターさんを大事にしながら、今言った修学旅行等というところでお金がまわるようになると、何となくブランド価値も上がって、より専門的な充実した海洋スポーツ活動ができる、大隅西海岸のようなイメージがつくのではないかという想いを持っています。そのようなことで、体育大学の海洋スポーツの学生や我々の教育効果が少し発揮できる気がしております。

前谷　嘉一（鹿屋体育大学　理事・副学長・事務局長）

鹿屋市さんと垂水市さんにお聞きしたいのですが、海洋スポーツを推進していこうということなのですけれども、先ほどセンター長が言われたように、リピーターの方が増えているということは、経験者が楽しいと思って増えていくのですけれども、スポーツというのはできるだけ若い世代のうちに経験した方が良いと思います。先ほど、高校生が修学旅行でスポーツ体験があると言っておられましたが、これは近場でありますと鹿屋市さん、垂水市さんの学校教育の中で、こういった海洋スポーツを取り入れていくというような考えはいかがなのでしょうか。よろしければ教えていただければと思います。それによっては、本学の海洋センターの機能を拡充していくことも考えなくてはいけないと思っております。

黒木　雅之（鹿屋市役所　市民スポーツ課）

私は、市民スポーツ課に在籍しており、鹿屋市の学校教育についてあまり詳しくはないので、自分自身の実体験からお話させていただきます。

私は鹿屋市高須町の出身で、既に閉校してしまったのですが、高須小学校、高須中学校の卒業生です。高須小学校、高須中学校では、授業のなかでマリンスポーツの体験を海洋スポーツセンターで実施していました。

現在、高須中学校が閉校となって他の学校がマリンスポーツ体験の授業を行っているかは把握していないのですが、マリンスポーツの授業はマリンスポーツを体験することができる貴重な体験であったため、今後も近くの小中学校で開催できれば良いと思っています。

また、市民スポーツ課では、今年はコロナで、昨年は天候の関係で開催できなかったのですが、毎年 7 月に海洋スポーツセンターの皆様を含む、多くの方の御協力もいただき、かのやマリンフェスタを開催しています。かのやマリンフェスタでは、マリンスポーツを体験できる場をつくって、マリンスポーツを楽しみ、体験するとっかかりになればと思っているところです。

中村　夏実（海洋スポーツセンター長）

ありがとうございます。加えて、垂水市からも 3 名の方にご参加していただいておりますが、どなたか小中学生、あるいは高校生のマリンスポーツ活動や自然体験活動の取り組みに関してご発言いただければと思います。よろしくお願いいたします。

木脇　翔（垂水市役所　社会教育課文化スポーツ係）

社会教育課文化スポーツ係の方は、毎年 8 月頃にマリンパークさんのところでマリンスポーツを楽しんで体験していただくというものを開催しております。今年は、新型コロナウイルスのために開催することができなかったのですが、マリンパークさん、大隅青少年自然の家さんと共同で、小中学生にマリンスポーツの楽しさであったり、青少年育成の機会として、来年度以降も開催をしたいと思っております。

中村　夏実（海洋スポーツセンター長）

ありがとうございます。高須小学校、高須中学校と廃校になってしまって、我々も残念に思っているところです。今までは、大学の授業の中に来ていただいて、大学生が一から指導案を考え、中学校の先生や我々教員もいる中で、実際に子どもたちを指導する経験をという授業を展開しておりました。この先も高須小学校の統合先の学校と考えていたのですが、新型ウイルス拡大の影響や、我々の時間割が変わるということもあって、再開には少し時間がかかりそうで残念に思っております。我々の授業と合同でできそうなところがあればとは思っていますが、なかなか上手くいかないところではあるので、修学旅行やイベントなどで実習という形で参加していくということは可能性としてあるのかと思っているところです。

他に何かご意見等ございませんでしょうか。

原田　耕蔵（鹿屋体育大学　理事）

テーマ的に、海洋スポーツと地域振興という観点が一番強いと思うのですが、海洋スポーツが地域振興のためにどのような役割を果たしているかという観点から意見を述べていただきたいと思います。例えば、ここに伊佐市の方がおられますけれども、伊佐市は、マリンスポーツではなくてリバースポーツですよね。川内川でカヤックなどを展開されていて、結構地域振興になっているのではないかと感じているのですが、そのあたりのご意見をいただければと思います。

植木　裕一郎（伊佐市教育委員会　スポーツ推進課）

こんにちは、植木と申します。鹿屋体育大学の卒業生でカヌーが専門で、海洋センターの方でも活動させていただいておりました。いま、元の大口市役所に入りま

して、伊佐市で20年勤務しております。伊佐市は、今年の鹿児島国体のカヌースプリント競技の会場ということで、こちらに誘致する活動にも参加しながら今年開催する予定だったのですが、3年後に延期なりました。カヌーの町ということで頑張っております。

先ほどの話でいくと、小学校の方にカヌー（普及艇）を持ち込んで、カヌー教室をするというのを小学校の希望を聞きながら行っております。10何校あるのですが、カテゴリーや参加人数も各小学校で違っていて、夏場にカヌー体験をしております。テーマとしては、伊佐はカヌーの町なので、「みんなカヌーをやったことがあるよ」といって大人になってほしいということです。

5月頃にはドラゴンボートレースというのが毎年行われていて、そちらの方にも学校やPTA関係でチームをつくって参加していただいて、地域に根差したかたちでドラゴンボートやカヌーに親しんでもらうように動いているところです。

日本で一番大きいと思うのですが、200何十人が来る冬の2泊3日で行うカヌースプリントの合宿というものも、私が事務局で20年くらいやっているところですけれども、今年はコロナウイルスの関係で縮小して開催するかどうか迷っているところです。そういったかたちで、川内川という川があるので、その川を活かして活動をさせていただいておりまして、この会議の方にも参加させていただき、いろいろと勉強させていただいております。

中村　夏実（海洋スポーツセンター長）

ありがとうございます。各小学校のカヌーを持ち込んでやられるというのは、市の事業としてやられているのですか。それとも、カヌー協会で持ち込んでやっているのかどちらなのでしょうか。

植木　裕一郎（伊佐市教育委員会　スポーツ推進課）

カヌーを持ち込んで教室をやるというのは、昔は割と私に直接アポがあって日付を合わせてというかたちで数校行っていたのですが、昨年くらいから各学校にアンケートを取りまして、市の事業として行っているところです。来年度も行う予定にしております。

中村　夏実（海洋スポーツセンター長）

ありがとうございます。学校と一緒にするというのは、行政にも協力をいただかないといけないところはあると思うのですが、理想である気がいたします。我々の方も今後、検討したいと思います。

他に何かご意見等ございませんでしょうか。

松下　雅雄（鹿屋体育大学　学長）

いろいろ出された意見が繰り返されていくことが必要ではないかと思います。というのは、20 数年前に錦江湾総合戦略会議がスタートを切りました。そして、錦江湾の中でどのような海洋プログラムをやられているのか毎年パンフレットに出されて、繰り返し行われてきました。先ほど、マリンパークたるみずの方が言われたように、一人であれもこれもやるというのは限界があります。ロビー活動から海での活動まで今実際にされているところを考えると、大隅青少年自然の家さんは海の施設を持っていますし、マリンパークたるみずさんもやられているし、例えば菱刈の方だったら、地域をあげてやられているし、それらの方々がお互いに連絡を取り合っていくことが大事になってくると思います。地元の人を対象にした教室だけではもったいないと思います。やはり、修学旅行であるとか外の人をどのように呼び込むプログラムを作るかです。先ほど、ロビー活動などをやらなければいけないと意見として出されましたが、やはりタッグを組んでチームをつくらなければいけないと思います。そうなると、連携協議会みたいなものを大隅地区だけでもまずつくって、お互いに力を出し合えるような話し合いをするというのがスタートかと思います。その時にやはり、大学がやるのか、大隅青少年自然の家さんがやるのか、マリンパークさんがやるのかと考えられますが、それよりも市の協力を得てスタートを切っていくというのがまず必要ではないのかと思います。関係者でお互いに連絡を取り合って、その時にまず、この海洋スポーツセンター協力者会議をやっておりますので、そこが一つ声掛けのスタートを切られたらどうでしょうか。

中村　夏実（海洋スポーツセンター長）

ありがとうございました。学長にまとめていただいたような形になりましたけれども、ぜひそういった方向に動けばと思います。村山様にもご協力いただきながら、本日のテーマでお話させていただいたところです。この場だけでは、色々なご意見があってまとまらないと思いますので、特に本日ご参加していただいている皆様は、現場で活動されている方々ですし、お顔も分かる方がほとんどですので、まずは皆さんで顔を合わせて、今日言えなかった本音も言える機会をつくりたいと思いますが、ご賛同いただけますでしょうか。

会議の時間もちょうど良い時間になってまいりましたので、このあたりで締めさせていただきたいと思います。村山様には、貴重な資料と共に、全体像をお話いただきまして、ありがとうございました。また、ご参加の皆様にも、お忙しところご意見を賜りまして、ありがとうございました。今後ともぜひよろしくお願いいたしたいと思います。

では、これにて令和 2 年度鹿屋体育大学海洋スポーツセンター協力者会議を終了させていただきたいと思います。本日は、ありがとうございました。